

埼玉大学日本語教育センター紀要
第8号 抜刷 (2014年3月)

〔論考〕

三島由紀夫著『豊饒の海』とタイの留学生

－「シャムの王子」たちのモデルは誰か－

嶋津 拓

三島由紀夫著『豊饒の海』とタイの留学生

— 「シャムの王子」たちのモデルは誰か —

Yukio Mishima's *The Sea of Fertility*
and the International Students from Thailand
— Who Were the Models for the “Siamese Princes?” —嶋津 拓ⁱ

Taku SHIMAZU

(要旨)

三島由紀夫の長編小説『豊饒の海』には、その第一巻『春の雪』に二人のタイ人留学生が登場する。しかし、この「シャムの王子」であるところの留学生に関しては、誰がその造形上のモデルとなったのか、あるいは、そもそもモデルが存在したのかについての一次資料がない。また、それに関する先行研究も存在しない。しかし、三島が残した『豊饒の海』創作ノートには、そのモデルに関して、手がかりとなる記述が見られる。本稿では、この記述を留学生教育史研究の観点から読みとくことで、『豊饒の海』において三島が造形した「シャムの王子」たちのモデルに関し、ひとつの推定または想像を提示する。

キーワード：三島由紀夫、柳澤健、『豊饒の海』、タイ留学生、学習院

1. はじめに

三島由紀夫の遺作となった長編小説『豊饒の海』には、三人のタイ人留学生ⁱⁱが登場する。すなわち、大正期の学習院高等科に留学する「パッタナディト殿下」と「クリッサダ殿下」、そして、戦後期の日本に留学する「ジン・ジャン」（月光姫）の三人である。

このうち、パッタナディトは国王ラーマ六世の弟であり、クリッサダはその従兄弟と設定されている。彼らは『豊饒の海』の第一巻『春の雪』で、その主人公である松枝清顕の行動に影響を与える役割を演じる。

また、ジン・ジャンは、松枝清顕および第二巻『奔馬』の主人公である飯沼勲が転生した（と考えられる）人物であり、第三巻の『暁の寺』で中心的な役割を演じる。彼女は、上記「パッタナディト殿下」の「いちばん末のお姫様」と設定されている。

この三人のうちジン・ジャンのモデルについては、新潮社で三島担当の編集者を務めた小島千加子の証言がある。それによると、「タイ国の留学生で十七、八歳の美人。しかも育ちがよくて日本語のペラペラな人」

（小島 1996：61）を探してほしいとの依頼を三島から受けた小島は、駒場の留学生会館に出かけ、そこで、当時、東京大学経済学部留学していた22歳のタイ人女性を紹介された。そして、1969年2月16日、彼女

ⁱ 埼玉大学 日本語教育センター 教授

ⁱⁱ タイの旧国名は「シャム」であり、三島由紀夫が『暁の寺』の中で述べているとおり、1939年に「シャムはその国号をタイと革めた」のであるが、便宜上、本稿では「タイ」という表現に統一する。ただし、引用文中においては、この限りでない。

を東京都大田区馬込の三島邸で三島由紀夫本人に引き合わせたという（小島 1996 : 65-66）ⁱⁱⁱ。

このジン・ジャンに対して、パッタナディトとクリッサダについては、誰がその造形上のモデルとなったのか、あるいは、そもそもモデルが存在したのかについての証言や一次資料がない。また、それに関する先行研究も存在しない。しかし、三島が残した『豊饒の海』創作ノート（以下、「創作ノート」という）には、その手がかりとなる記述が見られる。

本稿では、その記述を留学生教育史研究の観点から読みとくことで、『豊饒の海』において三島が造形した「シャムの王子」たちのモデルに関し、ひとつの推定または想像を提示したい。

2. 先行研究

前述のように、パッタナディトとクリッサダのモデルについては、それに関する一次資料も先行研究も存在しない。しかし、日本近現代文学の研究者である杉山欣也は、その著書『「三島由紀夫」の誕生』（2008）の中で、ひとつの興味深い着想を述べている。杉山は同書の中で、三島と学習院で同級だった板倉勝宏という元華族（子爵）が書いた「学習院の思い出」（執筆年不明）という原稿を紹介しているのだが、その中で板倉は、1940年代前半期の学習院高等科に、「タイ国のワラワン殿下とプラサット君（随行貴族学生）」という二人の「聴講生」が在籍していたと記している（杉山 2008 : 322）。そして、この記述を受けて杉山は、「作中と時代設定は異なる」ものの、三島はパッタナディトとクリッサダについて、「あるいは彼らから想を得たものかもしれない」との着想を述べている（杉山 2008 : 329）。

この着想は着想の次元にとどまっており、それを裏づける根拠を杉山は何ら示していないのであるが、筆者は杉山の着想に同意する。なぜなら、その着想を支持するような記述が、「創作ノート」の中に見られるからである。

本稿では、第5章でこの「創作ノート」について考察するが、その前提として、次の第3章と第4章においては、戦時下日本の「対泰文化事業」とタイ人「留学生の本邦招致」事業、ならびに「タイ国のワラワン殿下とプラサット君」という二人の「聴講生」の日本留学中の様子に関し、国際関係論および留学生教育史研究の領域における先行研究に基づいて整理しておきたい。

3. 日本の「対泰文化事業」とタイ人「留学生の本邦招致」事業

日本はタイ人留学生を20世紀初頭から受け入れている。しかし、同国からの留学生が急増するようになったのは1930年代中頃のことである。また、このころには日本もタイからの留学生受入に積極的になる。それは、1933年3月、いわゆる「満洲国」の正当性に疑問を呈したリットン調査団の報告書をめぐり国際連盟の総会決議において、ほとんどの国が同報告書を是としたのに対し、タイが唯一棄権票を投じたことから、日本がタイの存在を再認識したためである。

日本政府は、急増するタイ人留学生への対応を目的のひとつとして、1935年に財団法人国際学友会を設立する。同会は、「諸外国特に東方諸国の留日学生の保護善導を計り、此等学生に対し日常生活上の便宜の供与、日本語の学習、本邦諸学校入学の斡旋等勉学上の援助其の他之が指導啓発に必要な各種の事業」（国際学友

ⁱⁱⁱ ただし、毎日新聞社の記者だった徳岡孝夫は、1960年代の後半期に同社バンコク支局に勤務していた「女性秘書」こそが、三島にとって、「ジン・ジャンのモデルにしたいタイ女性」だったのではなかったかと「感じている」としている（徳岡 1996 : 129）。

会 1935 : 2) ^{iv} を実施した。また、その事業の一環として、1943 年には日本語学校を設置する。

国際学友会の事業対象はタイに限られていなかった。しかし、同会が運営した留学生宿舍の初期の在籍者は、タイからの留学生が最も多かった。また、同会で日本語教育を受けた者の数は、今日まで残されている学籍簿 (1938 年度～1944 年度) による限り、1943 年にその招聘が開始された「南方特別留学生」を除けば、半数以上がタイからの留学生だったという (河路 2003 : 306)。

タイからの留学生が急増した 1930 年代中頃は、日本政府が「国際文化事業」を開始した時期でもある。1934 年、日本政府は、「国際間文化の交換殊に日本及東方文化の海外宣揚を図り世界文化の進展及人類福祉の増進に貢献する」(国際文化振興会 1934 : 10) ことを目的として、財団法人国際文化振興会を設立し、同会を「国際文化事業」の実施母体とした。ただし、「国際文化事業」のうち、留学生の受入と派遣に関する業務は、翌年設立された上記の国際学友会にゆだねることになる。

国際文化振興会が設立された 1934 年は、日本が国際連盟を脱退した翌年にあたる。また、1920 年代から 1930 年代にかけての時期は、ヨーロッパの国々が自国文化を海外に発信するための機関を相次いで設立していた時期でもある。すなわち、「世界の文明諸国があらゆる方面に互りて、自国の文化を内外に顕揚し宣布する為めに広大な施設を整へ文化活動に努力して互に後れざらん」(国際文化振興会 1934 : 1-2) としていた時期でもあったのであり、日本は国際連盟脱退に伴う国際的な孤立を避けるとともに、他国に伍して、「自国文化の品位価値を発揮し、他国民をして尊敬と共に親愛同情の念を催さしむる」(国際文化振興会 1934 : 1) ことを主要目的として、「国際文化事業」を開始したとすることができる。

国際文化振興会は、その「事業の性質上外務省の監督のもとに事業の実施」(国際文化振興会 1964 : 14) にあたった。また、同会は「外務省文化事業部の補助団体」(稲垣 1944 : 41) としての性格も有していたのであるが、その外務省では、「国際文化事業」の担当課として、文化事業部第三課が 1935 年に設置された。同課の初代課長となったのは柳澤健という人物である。やがて彼は、タイに対する「国際文化事業」、すなわち「対泰文化事業」(柳澤 1943 : 91) において、中心的な役割を担うことになる。

1889 年に福島県の会津地方で生まれた柳澤健は、第一高等学校から東京帝国大学法科大学 (仏蘭西法律科) に進み、大学卒業後は高等文官試験に合格して逓信省に入った。その後、朝日新聞社の編集局論説班に転職し、『大阪朝日新聞』の紙面に文芸欄を設けたりしたのであるが、数年後には官界に戻り、今度は外務省に入った。同省では、亜細亜局第三課、在外公館 (フランス・スウェーデン・メキシコ)、文化事業部第一課に勤務し、1933 年に文化事業部第二課長、そして 1935 年には「国際文化事業」を担当する同部第三課長になった。

柳澤には、外交官としてのほかに詩人としての一面もあった。彼は東京帝国大学在学中に島崎藤村や三木露風に師事し、すでに大学卒業前には自身の詩集を刊行している。

このように「外交官」でもあり「詩人」でもあった柳澤が、外務省で「国際文化事業」を担当する文化事業部第三課の責任者となった。外務省の幹部職員としてはメイン・ストリームからはずれた経歴を有する彼がこのポストに就いたのは、かかる二面性が評価されたためではなかったかと想像できる。

その後、柳澤は一等書記官として在ベルギー日本公使館と在イタリア日本大使館に勤務し、1938 年には在ポルトガル代理公使になるのだが、1940 年、当時の松岡洋右外務大臣による「外交官の大衆誅首」(柳澤 1943 : 2) によって、柳澤は外務省を退官する。しかし、その 2 年後の 1942 年には、再び外務省および「国際文化事業」と関係することになる。

1941 年 12 月における英米への宣戦布告と「日泰攻守同盟条約」の締結によって、タイは日本の対外政策上、また、その対外政策を補完するための「国際文化事業」においても、きわめて重要な位置を占めること

^{iv} 本稿において 1940 年代までの日本語文書を引用する際には、引用文中における旧字体を新字体に直した。ただし、仮名遣いは原文にしたがった。

になった。このため、1942年1月には「日泰両国間学生交換協定」が、そして同年10月には「日泰文化協定」が調印されたのだが、後者の協定では、「締約国は両国間の文化関係の増進に寄与せしむる為夫々相手国の首府に於ける文化紹介機関の設置に努めるべく且右機関の事業に対し相互に能ふ限り便宜を供与すべし」(第11条)と定められており、日本政府は1943年、タイに「在盤谷日本文化会館」(同館は「日泰文化会館」と呼ばれることもあった)を開設した。在盤谷日本文化会館の館長ならびにその設置母体である財団法人日泰文化協会の理事長に任命されたのは、柳澤である。

在盤谷日本文化会館の開設は、「当初、外務省によって企画され、而も積極化したのは、昭和十七年の初頭、柳澤現日泰文化会館長が外務省の需めによって渡泰したのが、そもそもの初りであって、この頃を契機として会館創設への第一歩が印せられた」(額 1944:53)という。また、柳澤はその後も「数回に渉る渡泰による実状調査」(額 1944:53)を行つたらしい。すなわち彼は、在盤谷日本文化会館の開設に際して中心的な役割を担ったようなのであるが、その柳澤が「対泰文化事業」において重視した活動のひとつに「留学生の本邦招致」(柳澤 1943:97)事業がある。また、彼は留学生への渡日前と帰国後における施策、すなわち「渡日留学生の為の予備教育」と「帰国せる渡日留学生の連絡交換事務」も重要だと考えた(柳澤 1943:97)。実際、柳澤が館長を務めた在盤谷日本文化会館は、その傘下にあった日本語学校において、「渡日留学生の為の予備教育」の一環としての日本語教育も実施している。柳澤は、太平洋戦争開戦後の「対泰文化事業」、そしてタイ人「留学生の本邦招致」事業において、その中心的な位置に立ったのである。

4. ウイブン・ワラワンとプラサート・パンヤラチェンの日本留学

前述のように、三島由紀夫と学習院で同級だった板倉勝宏は、その原稿「学習院の思い出」において、1940年代前半期の学習院高等科に、「タイ国のワラワン殿下とプラサット君」という二人の「聴講生」が在籍していたと記述している。本章では、この二人の日本での様子に関し、板倉の証言や先行研究に基づいて整理しておきたいと考えるが、その前に、『豊饒の海』の第一巻『春の雪』において、「シャムの王子」たちがどのように描かれているかについてまとめておく。なお、『春の雪』からの引用は、すべて新潮文庫版に基づく。

タイ国王ラーマ六世の「弟君」であるパッタナディットとその従兄弟にあたるクリッサダは、「二人とも熱心な敬虔な仏教徒であったが、日常の服装作法はすべて英国風で、美しい英語」を話した。このため、ラーマ六世は「若い王子たちのあまりの西欧化をおそれて」、彼らの日本留学を計画した。当時、パッタナディットはクリッサダの妹(初代の月光姫)と恋愛関係にあり、彼女との「別離」は「悲しみ」を伴うものだったが、その点を除いては国王の提案に「異存がなかった」ことから、二人の王子は1912年の11月(あるいは12月)に渡日した。彼らは東京の松枝侯爵邸に滞在し、当初は「冬休みまで気ままに学校へ参観」に行くこと、その後は学習院に「年が改まってから通学する」こと、「正式に級に編入されるのは、日本語に習熟し日本の環境にも慣れた暁、春の新学期からということ」になっていた。しかし、翌年になっても二人は、「清瀬以外に友らしい友もなく、学校へは今までほとんど顔を出されない」という状況だった。

それでも、1913年の春には学習院高等科に正式入学したらしく、二人は松枝侯爵邸を出て、学習院の寮に入った。入寮直後の二人の様子については、次のように描写されている。

シャムの両殿下の学校における評判は、それほど良いとは云われぬ。何と云っても日本語がまだ不自由で、学習に差支えることは致し方がないが、友達の友好的な冗談が一切通じないので、じれったがられ、果ては敬して遠ざけられる。両王子のいつも絶やさぬ微笑も、粗暴な学生たちには、ただ得体のしれぬものに思われた。

両王子を寮に入れたのは外務大臣の考えだということだが、舎監はこの賓客の扱いに心を痛めているという噂を清頭はきいた。准宮様扱いで特別な部屋も差上げ、ベッドも上等なものを入れ、つとめて寮生たちと仲良く交際されるように、舎監は力をつくしているのだが、日を経るにつれ、王子たちは二人だけの城に閉じこもり、朝礼や体操にも出て来られぬことが多く、これがいよいよ寮生との疎隔を深めた。

こうなるにはいろいろな原因がからみ合っていた。来日後半歳に充たぬ準備期間は、王子たちを日本語の授業に馴染ませるには不足であったし、又その準備期間のあいだ、王子たちはそれほど勉強にいそまれたわけではなかった。もっとも生彩を放つ筈の英語の時間にも、英文和訳も和文英訳もただ王子たちをまごつかせるだけであった。

このような時にひとつの事件が起こる。「パッタナディト殿下のエメラルドの指輪が紛失した」のである。その時、「クリッサダ殿下が、これを盗難だとさわぎ立てたところから、問題が大きくなり、パッタナディト殿下は従兄弟の軽率を咎めて、内輪に納めることをのぞんだけれども、この王子も亦、心の裡では盗難だと信じている点では同断」だった。

この「クリッサダ殿下のさわぎ方」に対して、学校側は「学習院に盗難などというものはありえない」との反応を示した。しかし、これが盗難であったことは、第三巻の『暁の寺』で明らかになる。

この事件を契機として、二人の王子は寮を出て、帝国ホテルに移る。また、松枝清頭には、「どうあっても近いうちにシャムに帰るつもり」だと打ち明けた。その話を清頭から聞いた松枝侯爵（清頭の父）は、「もし王子の帰国をこのままに看過せば、王子たちの心に取り返しのつかない傷を与えることになり、終生、日本の思い出は忌まわしいものとなって残るであろう」と憂慮し、しばらく時間を置くために、夏季休暇期間中、二人の王子と清頭を鎌倉の別荘に遊ばせることにした。しかし、鎌倉滞在中にバンコクの王太后からパッタナディトあてに、彼の恋人である「月光姫が死んだ」という内容の親書が届いたことから、その1週間後、二人の王子は横浜から「英国船で帰国の途」につくことになった。こうして、「シャムの王子」たちの日本留学は1年に満たない期間で、しかも学習院高等科に正式入学してからは半年にも満たない期間で終わるのである。

三島由紀夫が「シャムの王子」たちを日本に留学させた1912年からちょうど30年後の1942年、二人のタイ人が日本に留学した。そのうちのひとり、ラーマ四世の曾孫にあたるウイブン・ワラワンで、父親のワンワイタヤコーン・ワラワン親王は、タイ外務省の顧問として、同国の政治と外交に影響力を有していた。彼は翌1943年に東京で開催された「大東亜会議」にタイ代表として出席している。

もうひとり、プラサート・パンヤラチェンで、彼の父親はタイで商業出版社を経営していた。プラサートはウイブンと異なり王族ではない。

この二人は、私費留学生として学習院高等科と東京帝国大学で7年間学ぶことになっていた。東京到着時にウイブンは、同盟通信記者のインタビューに対して、次のように語っている（原文英語、筆者訳）。

私は日本に7年間滞在します。貴族学校（筆者註：学習院のこと）と東京帝国大学で学ぶ予定です。大学では政治学を専攻するつもりです。私の兄は外交に関わっておりますので、私も帰国後はタイ外務省に勤めたいと考えております。日本に留学することになったのは、日本がタイにとって最も友好的で、また先輩格の国でもあるからです。現在のところ、私は日本語があまり理解できません。このため、まずは日本語を勉強したいと考えております（Japan Times & Advertiser 1942：1）。

ウイブン自身も認めているように、彼らは「日本語があまり理解」できなかつた。国際学友会（現在の日本学生支援機構東京日本語教育センター）に保存されている資料によれば、来日時における両名の日本語能

力は、「会話だけほんの少し」できるというレベルだったらしい（河路 2006 : 478）。

このため、ウイブンとプラサートの二人は、渡日翌月の 1942 年 5 月から、国際学友会で 45 週間の日本語教育を受けることになった。卒業時には、同会が制作した日本語教材『日本語教科書』の巻四を終えたという（河路 2006 : 478）。巻四のテキスト・レベルは、当時の「中学校一・二年程度」だった（河路 2006 : 191）。

国際学友会を卒業した二人は、1943 年 4 月、学習院高等科に進学した。学習院での留学生活については、プラサートが 1983 年にタイ研究者の市川健二郎のインタビューに対して、次のように証言している。

戦時中、ワンワイタヤコーン・ワラワン殿下の長男ウイブン・ワラワン殿下の学友として、殿下と私は宮内省の学習院旧制高等科に在学していた。配属将校の柏崎大佐（筆者註：柏崎延二郎陸軍大佐）はアジア人の留学生を親切にいたわってくれたので、感激した。目白駅に近い学習院の昭和寮で殿下と一緒に寝泊りしていたが、先生も寮生も親切な日本人だった。四三年の夏休みには、日本政府の招待で、殿下に同行して満州国皇帝を訪問した。秋の大東亜会議に出席したワラワン殿下は息子のウイブンとホテル・オークラ所有者の大众氏邸で再会を喜んだ。その時、タイ大使館員も同席していたが、私たち留学生と政治上の話などする場ではなかった（市川 1987 : 52）。

この証言にもあるように、ウイブンとプラサートは、三島が造形した「シャムの王子」たちの場合と同様、学習院の寮に入った。しかし、後者が主に「何と云っても日本語がまだ不自由」という理由から他の「寮生との疎隔を深めた」のに対し、前者は（少なくともプラサートの証言をそのまま信じる限りにおいては）、学習院の「親切な日本人」たちに囲まれて、まずまずの留学生活をおくったようである。また、留学中の待遇に関しては、国際関係論の研究者であるブルース・レイノルズが 1988 年にプラサートに対して行ったインタビューにおいて、プラサートは「東京では厚遇を得たと強調」（Reynolds 1991 : 116）している。しかし、学習院高等科で彼らより 1 学年上の板倉勝宏は、「何か寂しさうな二人であった」との証言を残している（杉山 2008 : 322）。ちなみに、板倉と学習院で同級だった平岡公威（三島由紀夫）は、管見の限り、この二人について何も語っていない。

当初、ウイブンとプラサートの留学期間は 7 年間と設定されていた。しかし、実際には 1943 年の年末までに帰国したようである（Reynolds 1991 : 109）。すなわち、学習院高等科での留学生活は、三島が造形した「シャムの王子」たちの場合と同様、1 年にも満たなかったのであるが、その早期帰国の理由として、プラサートは「日本語に対するフラストレーション」（Reynolds 1991 : 109）があったことを挙げている。当時の戦局やタイにおける対日観の変化を勘案した場合は、本当にそれだけが早期帰国の理由だったのか、必ずしも疑問なしとはしないのだが、国際学友会で 45 週間の日本語教育を受けたはずのウイブンとプラサートにとっても、「何と云っても日本語がまだ不自由」だった「シャムの王子」たちの場合と同様、日本語は留学生活における大きな障碍になっていたようである。

板倉によれば、ウイブンとプラサートの学習院における留学生活については、同院にも「記録がないらしく」（杉山 2008 : 322）、これ以上のことはわからない。また、わからないという点で言えば、そもそも彼らがどうして日本に留学することになったのかという、その経緯についても明らかではない。三島が造形した「シャムの王子」たちは、国王のラーマ六世が「若い王子たちのあまりの西歐化をおそれ」たため、日本に留学することになった、すなわちタイ側の意向によって日本に留学することになったとされているのだが、実際に戦時下の日本に留学したウイブンとプラサートの二人については、タイ側の意向によって、その日本留学が計画されたのか、それともタイ人「留学生の本邦招致」を重視していた日本側の意向によって日本に留学することになったのか、必ずしも明らかではない。

しかし、日本語教育史と留学生教育史の研究者である河路由佳は、ウイブンとプラサートの日本留学中、この二人は日本で「官民あげて厚く遇され」、また日本政府は両名を「旅行に招待して満洲皇帝に謁見させたり」しており、「彼らは「日タイ親善」の象徴として、効果的に利用されたと言える」としている（河路 2006 : 438）。さらに、「ウイブンは帰国後若くして亡くなったが、プラサートは 1983 年 11 月に東京で開かれた「南方特別留学生 40 周年記念国際会議」にタイ代表団長として来日して」おり、この日本政府の招聘・資金負担による「南方特別留学生事業の始まる以前の私費留学生であったプラサートがこの会議に主要メンバーとして参加していることは、彼らの留学と南方特別留学生の関連性を物語っている」（河路 2006 : 438）、あるいは、彼らの留学は「南方特別留学生に通じる意味を帯びていたことの表れとも見える」（河路 2005 : 56）としており、ウイブンとプラサートの日本留学が計画された背後には、日本政府の何らかの意向が存在していたのではなかったかと示唆している。実際、彼らが日本留学を 2 年弱で切り上げて帰国することになった時、日本側は「当惑した」という（Reynolds 1991 : 109）。

かりにウイブンとプラサートの日本留学の背後に日本政府の何らかの意向が存在していたとしたら、彼らの日本留学と前後して日本の「対泰文化事業」、そしてタイ人「留学生の本邦招致」事業の中心的な位置に立つことになった柳澤健が、その際に何かしらの役割を演じたのではなかったかと想像することは、けっして的外れとは言えないだろう。また、1960 年代に『豊饒の海』の執筆を計画していた三島由紀夫が、その小説の中に「シャムの王子」たちを登場させようと考えた際に、みずからの学習院高等科時代の記憶、すなわち自分の 1 学年下にタイ人留学生が在籍していたことを思いかえし、彼らが当時なゆえ日本に留学していたのか、あるいは、どのようなスキームで日本に留学していたのかということを知ろうと考えたとしたら、そのための調査の過程において、柳澤健の存在に気づくこともありえたことであつたらう。

5. 創作ノート

既述のように、『豊饒の海』に登場する「シャムの王子」たち、すなわちパッタナディトとクリッサダについては、誰がその造形上のモデルとなったのか、あるいは、そもそもモデルがいたのかという点に関する一次資料が存在しない。また、三島が残した「創作ノート」にも、彼らのモデルについては、直接的な記述がない。しかし、「創作ノート」に直接的な記述が見あたらないということは、その必要がなかったからではないか、すなわち、三島自身が実際に出会ったことのある人物をヒントにして、「シャムの王子」たちを造形したからではないかという推測を、逆に成立させる。

このように、「シャムの王子」たちのモデルに関しては、「創作ノート」の中にも直接的な記述がないのであるが、戦時下において日本の「対泰文化事業」とタイ人「留学生の本邦招致」事業の中心的な立場にあつた柳澤健については、「創作ノート」の中に記述が見られる。その「創作ノート」とは、三島が残した数多くの「創作ノート」の中でも初期の、まだ『豊饒の海』というタイトルも決まっていなかった時期に作成されたい、表紙に『大長編ノート 2』と書かれたノートである。このノートは、現在、三島由紀夫文学館（山梨県山中湖村）に収蔵されているが、その一部が 2002 年に新潮社から出版された『決定版三島由紀夫全集』の第 14 巻で公開されるとともに、残りの部分も鼎書房が 2007 年に発行した『三島由紀夫研究』第 4 号に、「未発表「豊饒の海」創作ノート①」として掲載された。柳澤に関する記述は、後者の 115 頁から 116 頁に見ることができる。

そこには、はじめに柳澤の経歴が記されている。すなわち、「大学法科 → 外務省一等書記官」^v および「日

^v ここには「仏法」という加筆もなされているが、これは柳澤が東京帝国大学法科大学で仏蘭西法律科に在籍していたことを示したものだらう。

タイ文化協会の会長（戦争中）^{vi}とあり、その交流関係については、「久米正雄や菊池（筆者註：菊池寛）の仲間」と記されている。また、「柳沢健」という名前の横には、「仏クロードル大使をまねた」と書かれているが、これは1920年代に駐日フランス大使を務めたポール・クロードル（Paul Claudel）と同様、柳澤が「外交官」と「詩人」の二面性を有していたことを反映した記述だろうと思われる。

さらには、「柳沢は死んだ」との記述もある。実際、彼は1953年5月に亡くなっており、この「創作ノート」が記された1960年代には、すでに彼に取材することは不可能になっていたのだが、かかる記述があることから推測するならば、もし柳澤が生きていたとしたら取材したいという意志が、三島にはあったのかもしれない。

その「柳沢は死んだ」という記述の後には、「田中幸太郎、— まとめて「南太平洋の夕暮」と書かれている。このうち、「田中幸太郎」は「田中耕太郎」の、「南太平洋の夕暮」は「印度洋の黄昏」の誤記（あるいは取材相手の錯誤によるもの）ではないかと考えられる。戦後期に文部大臣や最高裁判所長官を務めた田中耕太郎は、第一高等学校で柳澤と同級であり、後者の遺稿集『印度洋の黄昏』の公刊（1960年）にも尽力している。

柳澤に関する項には、「石井氏に会ふ」として、下記のような記述も見られる。

フランス語巧いので、タイの王室、(スイス系フランス語)

当時の権力者ピブンがフランスびるき

フランス語の話せるのを大事にする。

木戸御免。(石井氏大使館参事官に会ふのハむつかしい。)

当時、国際連盟にみたワンワイ・タイヤコン殿下がフランス語

その妹は詩人 (p.115)。

この部分に関しては、柳澤はフランス語が話せたので、タイの、「フランスびるき」で「フランス語の話せるのを大事」にする王室や政府高官たちに食い込むことができたと解釈するのが妥当だろう。当時のタイが「フランスびるき」であったことは、かつてフランスに勤務したことのある柳澤自身も認識していて、彼は、「僕の泰国行は適所適才だ」（柳澤 1943：24）と考えた理由のひとつとして、このフランスとの関係を挙げている。すなわち、「ピブン首相は仏蘭西、ヴィチット外相も仏蘭西、ブライウン文相は独逸と仏蘭西、ワンワイ殿下は英国と仏蘭西」（柳澤 1943：24）というように、柳澤のカウンターパートとなったタイの政府高官たちは、いずれも「仏蘭西を留学地にしてみた」（柳澤 1943：26）のであり、フランス文学を日本語に翻訳できるだけの言語能力を有していた柳澤と、フランス語でコミュニケーションをはかることができたのである。ちなみに、三島の「創作ノート」と柳澤の回想に出てくる「ワンワイ・タイヤコン殿下」あるいは「ワンワイ殿下」は、戦時下の学習院高等科に留学したウイブンの父親である。

これらのフランス語をめぐる情報、すなわち「創作ノート」の言葉を借りるならば、「フランス語の伏線」に関する情報を三島に提供したのは、「石井氏」という人物である。この「石井氏」が誰であるかを特定するのはむずかしいが、「石井氏大使館参事官」と書かれていることから推測するならば、戦時下のバンコクにあって日本大使館の参事官を務めていた石井康のことを指すのではないかと考えられる。彼は第一高等学校と東京帝国大学で柳澤の後輩であり、1920年に高等文官試験（外交科）に合格して、外務省に入省した。バンコクに赴任する前は内閣情報局第三部長だった。外務省を「誡首」された柳澤に対して、タイへの赴任を「膝詰め談判」（柳澤 1943：6）したのも石井だったという。石井が亡くなったのは1968年1月のことだから、のちに『豊饒の海』と名づけられることになる「大長編」小説の執筆を1960年代の前半期には構想しはじめていた三島が石井に面会することは、時間的には可能だったはずである。ちなみに、石井は三島の父親であ

^{vi} 当時の柳澤の正確な役職名は、「財団法人日泰文化協会理事長」である。

る平岡梓と第一高等学校および東京帝国大学法科大学で同期であり、あるいはその父親の線から、三島は石井の存在を知ったのかもしれない。

このように、三島は柳澤について調査しているのだが、ここまでだったら、三島は後に『豊饒の海』というタイトルが与えられることになる「大長編」小説に、柳澤をモデルとする人物を登場させようと考えていたのではなかったかと想像することもできるだろう。しかし、「創作ノート」の柳澤に関する項には、「日タイ協会事ム所」^{vii} という見出しが付された箇所に、「国際学友会—留学生」という記述も見られる。国際学友会は、前述のように、ウイブンとプラサートが学習院高等科に入学する前に 45 週間の日本語教育を受けた機関である。この記述から想像するならば、三島は「大長編」小説の執筆を構想していた時に、若き日の学習院高等科時代に出会った二人のタイ人留学生がどこで日本語を習ったのかということに興味を持ち、また、そのことも含めて当時の事情を知るために、「日タイ協会事ム所」を訪れたのではなかったかとすることもできる。

国際学友会が設立されたのは、柳澤が外務省文化事業部第三課長だった 1935 年 10 月のことである。したがって、前記の「国際学友会—留学生」という記述については、ウイブンとプラサートの日本語学習に関連した記述ではなく、単に柳澤の業績を記しただけのものと解釈することも可能かもしれない。しかし、彼が外務省の文化事業部第三課長になったのは、国際学友会が設立されるわずか 2 か月前の 1935 年 8 月のことである。また、外務省内において同会の設立を主導したのは、文化事業部ではなく東亜局だった。すなわち、柳澤は国際学友会の設立に際して中心的な役割を担ったわけではないのである。また、彼は設立後の同会の運営には関与していない。このため、「日タイ協会事ム所」の関係者が柳澤の業績として「国際学友会」の名前を挙げたとは考えにくく、むしろ、この「国際学友会—留学生」という記述に関しては、前記のように、ウイブンとプラサートが学習院高等科に入学する前に受けた日本語教育（あるいは、彼らを含めた戦時下のタイ人留学生が受けた日本語教育）の実施機関を三島が知ろうとした、その痕跡と考えるほうが妥当だろう。また、かかる記述が「創作ノート」の中に残されていることから想像するならば、三島は「シャムの王子」たちを国際学友会に通わせ、彼らが「日本語に習熟」する様子を小説の中に取り入れようと構想していたのかもしれないと言うこともできる。しかし、国際学友会が設立されたのは 1935 年、すなわち昭和 10 年のことだったから、大正期に来日したことになっている「シャムの王子」たちを同会で学ばせることはできなかった。また、国際学友会が設立される以前は、非漢字圏出身の留学生のための日本語教育機関は日本に存在しなかった。これらの事情ゆえか、「シャムの王子」たちが「日本語に習熟」する様子については、『豊饒の海』の中で何ら描写されることがなく、ただ漠然と、彼らは「何と云っても日本語がまだ不自由」だったと描かれるにとどまっている。

6. おわりに

以上、「創作ノート」を手がかりにして、三島由紀夫の遺作となった（あるいは自ら遺作とした）『豊饒の海』に登場する「シャムの王子」たちの造形上のモデルは、1940 年代前半期の学習院高等科に留学した二人のタイ人留学生だったのではなかったかという推定または想像を提示してきた。しかし、これはあくまでも推定（想像）にすぎず、それを完全に裏づける一次資料は、現在までのところ見つかっていない。また、当時 18 歳だった三島由紀夫が、この二人の留学生に対して、どのようなまなざしを向けていたのかという点も明らかではない。なぜなら、管見の限り、三島は彼らについて、何も書き残していないからである。

将来的に新しい資料が発見されることを期待したい。

^{vii} 財団法人日本タイ協会のことか。同会は「暹羅協会」として 1927 年に設立された。

参考文献

1. 市川健二郎 (1987) 『日本占領下タイの抗日運動－自由タイの指導者たち－』 勁草書房
2. 稲垣守克 (1944) 「国際文化振興会の事業」『日本語』7月号、pp.41-43.
3. Japan Times & Advertiser (1942) Brother of Thai prince here to study at Teidai, *Japan Times & Advertiser*, Evening Edition, April 25, 1942, p.1.
4. 河路由佳 (2003) 「国際学友会の成立と在日タイ人留学生：1932-1945の日タイ関係とその日本における留学生教育への反映」『一橋論叢』第129号、pp.301-313.
5. 河路由佳 (2005) 「その人の〈声〉に耳を澄ますーオーラル・データの豊かさとそのアーカイブ化をめぐる議論のためにー」『史資料ハブ：地域文化研究』第5号、pp.48-57.
6. 河路由佳 (2006) 『非漢字圏留学生のための日本語学校の誕生－戦時体制下の国際学友会における日本語教育の展開－』 港の人
7. 小島千加子 (1996) 『三島由紀夫と榎一雄』 筑摩書房
8. 国際文化振興会 (1934) 『設立趣意書、事業綱要及寄附行為』
9. 国際文化振興会 (1964) 『KBS30年のあゆみ』
10. 国際学友会 (1935) 『国際学友会設立趣意』
11. 工藤正義・佐藤秀明翻刻 (2007) 「未発表「豊饒の海」創作ノート①」『三島由紀夫の演劇－三島由紀夫研究④－』 pp.112-125.
12. 額彦四郎 (1944) 「日泰文化会館の使命」『日本語』第5号、pp.52-54.
13. Reynolds, E. Bruce (1991) Imperial Japan's Cultural Program in Thailand, Goodman, Grant K. (ed.) *Japanese Cultural Policies in Southeast Asia during World War II*, MacMillan Press, pp.93-116.
14. 杉山欣也 (2008) 『「三島由紀夫」の誕生』 翰林書房
15. 徳岡孝夫 (1996) 『五衰の人－三島由紀夫私記－』 文藝春秋
16. 柳澤健 (1943) 『泰国と日本文化』 不二書房
17. 柳澤健遺稿集刊行委員会編 (1960) 『印度洋の黄昏』